河北新報
2010年(平成22年)
2月8日(月)
夕刊

精神障害者 どう支援する?

一問一答

菊地茂さん(53) NPO法人理事長

個性認め合う人の輪作ろう

統合失調症や強迫神経症、難病症、人との関係で生きづらさを抱える精神障害者の労働支援するNPO法人「シャロームの会」の理事長を務める。法人の認証を取得してから(6年余り)歴史は浅いが、地道に活動の幅を広げ、行政や福祉関係者から注目を集める。理念は「一人一人の個性を大切にすること。」

「シャロームはヘブライ語で大丈夫という意味。人は病気であってもなくても、そのままで十分すてきな存在だから」。施設に通うメンバーには働くことを強要せず、休みたい時には休める環境づくりに努めています。拠点となるのが仙台市若林区の「来てくれるだけでいいんだよ」と声を掛け、顔を合わす度に握手を求めた。3カ月後、変化が起きた。掃除や買い出しをするメンバー約40人が登録し、併設する喫茶店、大衆とオープンで接客や調理場での料理などに取り組む。

一象徴的存在」と職員の間でこう話題に上る男性がいる。小学5年生の頃、親以外とは口をきかないたった一人で歩いてきた。年以来、自宅に引きこもっていたが、言葉を発してくれる日が楽しみです。

本業は行政書士。10年前、大学時代の恩師から老舗の財団法人理事に相談を受けたことが転機になった。恩師の一人娘が統合失調症を患って自宅にこもりきりだった。

自立を手助けしようと、行政書士事務所を職親制度の受け入れ先として登録した。自治体から委託を受け、障害者に職業訓練の場を提供する制度。結局、その女性は来られなかったが、別の女性は受け入れた。

学生ボランティアも増えてきた。職員や仲間、ボランティアと一緒に支え合う態勢が整ってきました。と喜ぶ。

しかし、いまは社会の偏見は根強い。身内に精神障害者がいる事実を親族や近所に隠す事例はなくなっていない。

心の病を抱えた人たちが地域で暮らすには?

「交流の輪を広げ、地域全体で共存する社会を構築することが不可欠。お互いの弱さを認め合うことが、障害の有無を越え、生きやすさにつながるのです」

生活文化部・嘉田浩一

写真部・小林一成

きくち・しげる　宮城県松島町生まれ。東北学院大法学部卒。松島町職員、建設会社勤務を経て1992年、菊地行政書士事務所(現シャローム行政書士事務所)を設立した。宮城県精神保健職親会副会長。宮城野区在住。シャロームの会022(293)3056。

連絡先はシャロームの会022(293)3056。

初めは戸惑いの連続だった。「彼女たちの特徴は疲れやすいこと。前日まで元気でも、急に動けなくなって欠勤することがしばしば」。怒りを抑えきれない時もあったという。

「本を読み、カウンセリングスクールに通って勉強を重ねる。うちら、頑張りすぎて心が悲鳴をあげている障害者のまじめさや繊細さが分かってきたんです」

きめ細かな支援を講じるため、仕事の内容や税理士との相談、司法書士の賛同を得て、法人を設立した。

喫茶店には障害者や家族を対象にした心の相談会や地域住民との交流会などを積極的に開く。趣旨に共鳴して活動を手伝